

『斜陽』における太宰治

はじめに

太宰治は、志賀直哉の言うように、「弱さの意識から、その弱さを隠そうとする」、そういう人かもしれない。しかし毎日毎日がまぐるしく変化してゆく今日、太宰のようにしっかりと自己をみつめ、自己を否定し、自己に忠実たらんとする人間は、ごく少数となつてきているのではないか。多くは、自己になげかけられた疑問や疑惑も、結局時の流れがいつかは解決してくれるであらうと、いつも受身の姿勢で待っているのである。そうであつてはならないと思ひながら、私も例外ではないと痛感する。だからこそ、いつも考へる事を忘れた太宰に、「人間」を感じ、死の文学、道化の文学と言われる文学の中に精一杯生きようとした太宰の「青春」を感じないではいられないのである。

数ある太宰の作品の中で、特に『斜陽』を選んだのは、たしかにそれが、彼の代表作の一つであつた事も、その理由の一つであり、また、奥野健男氏の言われるように、「『斜陽』が、太宰の作風の全貌を最もよくあらわしている。」と思つたからである。さらに奥野氏の説明をかりるなら、「敗戦の翌々年、作者の自殺の前年にあたる一九四七年の七月から四か月間『新潮』に連載された『斜陽』は、太宰治の名を一度に高め、文学史的にみても、このくらい時代と作

西野 由美子

品とが完全にマッチした例は、そう多くない」そうである。つまり時代と作品のマッチとは、没落貴族という題材をとりあげた事なのである。そして、敗戦後の状況を背景として、「単なる食糧不足と、節生活からくるみじめさを、没落貴族というかっこうの階級に、自己を同一化することにより、甘美な感傷性」にすりかえたのであるなら、当時『斜陽』は誤り読まれたということになる。しかし本当の『斜陽』のよさは、単なる客観小説ではなく、作家自身つまり太宰自身が懸命となつて、四人の登場人物の中に自己をつぎ込んだところにあるのではないだろうか。

本稿においては、『斜陽』に登場する、お母さま、直治、上原、かず子の四人に焦点をしぼり、太宰との共通点や、そこに見出される彼の思想、そして太宰の生と死の問題を考えてみたいと思う。

なお、平野謙氏の『太宰治論』の中に

四人の運命の物語ではなくて、正しくは五人の運命を描いた作品と申しましたが、女主人公とその母、その弟と作家という四人に劣らぬ重要人物として、私はその作家の妻をあげたいのです。一重險でひつつめ髪に結っている作家のあわれふかい忍従のすがたに、作者は女主人公とはちようどうらはらの祝福を与えてい

る。という説がある。しかし上原の妻の場合、直治の遺書の部分と、か

ず子が上原のアパートをたずねて行った場面において、ごく外面的なわずかな描写しかあたらえていないため、やはり四人だけにしぼる事にする。

一 お母さまと太宰治

直治はお母さまについて次のようにのべている。

「爵位があるから、貴族だといふわけにはいかないんだぜ。爵位が無くて、天爵といふものを持つてゐる立派な貴族のひとつもあるし、おれたちのやうに爵位だけは持つてゐても、貴族どころか、賤民にちかひのものもある。岩島なんてのは（と直治の學友の伯爵のお名前を擧げて）あんなのは、まつたく新宿の遊廓の客引き番頭よりも、もつとげびてる感じぢやねえか。こなひだも柳井（と、やはり弟の學友で、子爵の御次男のおかたのお名前を擧げて）の兄貴の結婚式に、あんちぎしやう、タキシードなんか着て、なんだつてまた、タキシードなんかを着て來る必要があるんだ、それはまあいいとして、テールスプーチの時に、あの野郎、ゴザイマスルといふ不可思議な言葉をつかつたのには、げつとなつた。氣取るといふ事は、上品といふ事と、ぜんぜん無關係なあさましい虚勢だ。高等御下宿と書いてある看板が本郷あたりによくあつたものだけれども、じつさい華族なんでものの大部分は、高等御乞食とでもいつたやうなものなんだ。しんの貴族は、あんな岩島みたいな下手な氣取りかたなんか、しやしないよ。おれたちの一族でも、ほんものの貴族は、まあママくらゐのものだらう。あれは、ほんものだよ。かなはねえところがある。」

直治の言う、「高等御乞食」と言われる人間ばかりが繁殖している世の中において、「ほんものの貴族」であるお母さまのような存在は、ごく少数である。少数というものは、多数に同調せざるを得なくなる。そしてまた、そうしなければ生きてゆくことはできなくなるのである。つまりお母さまが、彼等に順応しないままで生きてゆくこととする事は、大変な困難を必要とし、かといって、お母さまが、彼等の世界に順応して生きてゆく事も「ほんものの貴族」であるがゆゑに不可能という事になる。順応しないで生きてゆく事も順応して生きてゆく事も、お母さまにとって不可能となれば、「生きる」という事も、当然不可能となってくる。結局、お母さまは、死んでゆくより仕方のない、かわいそうな人という事になる。俗世間に染まる事のできないお母さまの態度は、西片町の家を離れ、伊豆の家に移ろうとする時、行動的なかず子とは反対の、消極的な態度となつてあらわれてくるのである。そこで問題となってくるのは、お母さまの死の原因である。お母さまの死は、結核が原因となつた病死である。しかし、それは「外面的原因」であつて、「内面的原因」の追求がなされるべきなのである。

お母さまは、おや？ と思つたくらゐに老けた弱々しいお聲で、「かず子があるから、かず子があてくれるから、私は伊豆へ行くのですよ。かず子があてくれるから。」と意外な事をおつしやつた。

私は、どきんとして、

「かず子があてなかつたら？」
と思はずたづねた。

お母さまは、急にお泣きになつて、

「死んだほうがよいのです。お父さまの亡くなつたこの家で、お母さまも、死んでしまひたいのよ。」

と、とぎれとぎれにおつしやつて、いよいよはげしくお泣きになつた。

以上のお母さまとかず子の会話から、お母さまは、もしかず子や直治という子供がいなければ、夫をなくし、多数に同調して生きてゆけない事を知つた時、すぐにでも命を断つていた人なのである。彼女の「内面的原因」、それは、現実社会に順応し得なかつた事にあると言へる。

次に、太宰とお母さまとの結びつきである。お母さまが貴族の出身であるという事と、彼が青森県下でも有数な大地主、津島家の出身であるという事は、たとえ貴族と地主という階級的な差はあるにしても、どちらも上層と言われる身分の出身という事において共通点を見出すことができる。しかし太宰は、名家の出身であるにもかかわらず、それに甘える事をけつしていさぎよしとしなかつたのである。だから彼は、「氣取る」という事を最もきらつていた。したがって、豊島与志雄氏の言われるように、「『氣取る』ということの『反俗精神』」として、お母さまを描いているのである。そして直治の言うように、「『氣取る』といふ事は、上品といふ事と、ぜんぜん無關係なあさましい虚勢」なのである。それにひきかえお母さまの振舞は、「氣取り」ではなく「真の上品さ」であつた。それは、生家の新興成金にない、真の貴族性を託したものである。しかし太宰にとって問題となるのは、現実の世界なのである。それは、お母さまのような「ほんものの貴族」には、とうてい生きてゆけない現実なのである。かず子の言うように、「お母さまのやうに人と争

はず、憎まざうらまず、美しく悲しく生涯を終る事の出来る人は、もうお母さまが最後で、これからの世の中には存在し得ない」のである。だから、お母さまは、太宰にとってはあくまでも理想の人であり、観念の世界での存在でしかなかつた。そして彼は、彼が理想とするお母さまを、美しいままで滅ぼしてしまつたのである。

お母さまは滅びても、太宰は滅びるわけにはいかなかつた。なぜなら太宰にはまだ、現実の世界が残されていたし、苦惱してそれと戦う力が、まだ尽きていなかつたからである。そして太宰の現実との格闘は、直治の苦惱の姿となつてあらわれてくるのである。

二 直治と太宰治

現実を生きぬくため、直治は彼の階級意識を懸命になつて捨てようとした。高等御乞食の住む現実には、私利私欲の充滿した俗物世界である。その世界に「上品」を持って生きるという事、それはかえつて「下品」の表出となつてくるのである。そこで彼は、その遺書の中で言うように、「僕は下品になりたかつた。強く、いや強暴になりたかつた。さうして、それが、所謂民衆の友になり得る唯一の道」と考へた。しかし、貴族の血をひいている直治にとって、「下品になるためには、お酒くらゐでは、とても駄目」だったのである。「いつも、くらくら目まひをしてゐなければならなかつた」のである。そしてそのため、麻薬を用いる事によつて、家を忘れ、父の血統に反抗し、母の優しさを拒否し、いわゆる「反逆児」となつて、自己破壊をこころみたのである。そんなにまでしても、直治はいわゆる「民衆の友」には、なり得なかつた。なぜなら、彼自身

「お金の事で人と争ふ事」も「人にたかる事」さえも、できない人間だったからである。それは、どうしても断ち切ることのできない、貴族の血であった。そして、それは富豪の家に生まれた太宰自身の血統につながることである。太宰がその血統を、名門意識を、誇りとしていた事も事実であるが、彼にとって最大の敵である名門意識も、故郷においてはそうであつても、都会においては、ただの田舎の金持ちすぎなかつたのである。したがつて、その認識が、かえつて劣等感となり、それを補おうとしての、名声欲と気取りが彼の最大の弱点となつたのである。

以上の事から、『斜陽』に登場する直治は、太宰の分身と言える。したがつて、「夕顔日誌」や「直治の遺書」における直治の苦悩は、同時に太宰自身の苦悩なのである。

「直治の遺書」の中で、彼は「死」について実にさまざまに、述べている。

生きてゐたい人だけは、生きるがよい。

人間には生きる権利があると同様に、死ぬる権利もある筈です。

生きて行きたいひとは、どんな事しても、必ず強く生き抜くべきであり、それは見事で、人間の榮冠とでもいふものも、きつとその邊にあるのでせうが、しかし、死ぬことだつて、罪では無いと思ふんです。

僕は、僕といふ草は、この世の空氣と陽の中に、生きにくいんです。生きて行くのに、どこか一つ缺けてゐるんです。足りないんです。いままで、生きて來たのも、これでも、精一ぱいだったのです。

僕は、死んだほうがいいんです。僕には、所謂、生活能力が無いんです。お金の事で人と争ふ力が無いんです。僕は、人にたかる事さへ出来ないんです。

僕には、希望の地盤が無いんです。

結局、僕の死は、自然死です。人は、思想だけでは、死ぬるもでは無いんですから。

太宰の「死」の原因を、直治の「死」を通して考えるなら、次の三つによるものと考えられる。

その一つとして「道化のくいちがい」という事があげられる。夕顔日誌の中に、「僕は友人の心からたのしさを笑顔を見たいばかりに、一篇の小説、わざとしくじつて、下手くそに書いて、尻餅ついて頭かきかき逃げて行く。」という文面がみられる。つまりこれが、太宰の言う「道化」なのである。彼は、それによつて人間との唯一の結びつきを、見出したのである。『人間失格』の大庭葉蔵の言葉をかき取るなら、それは「自分の、人間に對する最後の求愛」だったのである。しかし、その「お道化」も、「おもてでは、絶えず笑顔をつくりながらも、内心は必死の、それこそ千番に一番の兼ね合ひとでもいふべき危機一髪の油汗流してのサーヴィス」であり、「人間に對して、いつも恐怖に震ひをのき、また、人間としての自分の言動に、みぢんも自信を持てず、さうして自分ひとりの懊惱は胸の中の小箱に秘め、その憂鬱、ナアヴァスネスを、ひたかくしに隠す。」そういうものだった。だからいつかは、壁につきあたり、こわれた道化の中から、次のような言葉が生まれてくるのである。

僕が早熟を装つて見せたら、人々は僕を早熟だと噂した。僕がなまけものの振りをして見せたら、人々は僕を、なまけものだと

噂した。僕が小説を書けない振りをしたら、人々は僕を、書けないのだと噂した。僕が嘘つきの振りをしたら、人々は僕を、嘘つきだと噂した。僕が金持ちの振りをしたら、人々は僕を、金持ちだと噂した。僕が冷淡を装つて見せたら、人々は僕を冷淡なやつだと噂した。けれども、僕が本當に苦しめて、思はず呻いた時、人々は僕を、苦しい振りを装つてみると噂した。どうも、くひちがふ。

結局、自殺するよりほか仕様がないのぢやないか。

このやうに苦しんでも、ただ、自殺で終るだけなのだ、と思つたら、聲を放つて泣いてしまつた。

彼は、「道化」によつて、人間社会とのつながりを見出したのである。その「道化」にさえも「くいちがい」が生じたのであれば、直治には、自分と人間社会を結びつけるものは、すでに何も残っていない。結びつけるものが残っていないならば、「結局、自殺するよりほかに仕様がなない」のである。

第二の原因として、「罪の意識」ということが、あげられる。直治の遺書には、「罪」は次のように提出されている。

いつたい、僕たちに罪があるのでせうか。貴族に生まれたのは、僕たちの罪でせうか。ただ、その家に生れただけに、僕たちは、永遠に、ユダの身内の者みたいに、恐縮し、謝罪し、はにかんで生きてゐなければならぬ。

この言葉からもわかるように、彼の罪は、自己の出身を背景にして、自己の内部において意識化した「罪」であり、その「罪の意識」から生じる、「人間恐怖」なのである。そして『人間失格』の大庭葉

蔵に言わせるなら、「自分は神にさへ、おびえてゐました。神の愛は信ぜられず、神の罰だけを信じてゐる」のである。ここで、「神」という言葉は太宰にとつて「人間」という言葉とも置きかえる事ができる。彼は、自己の創造した罪に、神がくだす罰を、いつも恐怖して待っていたのである。

第三の原因として「拒否能力の無い事」があげられる。これは、直治の遺書の中にみられる言葉である。

友人がみな愈けて遊んでゐる時、自分ひとりだけ勉強するのは、てれくさくて、おそろしくて、とてもだめだから、ちつとも遊びたくなくても、自分も仲間入りして遊ぶ。

これと同等の意味をなす言葉を、『人間失格』の大庭葉蔵の言葉の中にも発見することができる。

自分の不幸は、拒否の能力の無い者の不幸でした。すすめられて拒否すると、相手の心にも、永遠に修繕し得ない白々しいひび割れが出来るやうな恐怖におびやかされてゐるのです。

これは、上原に言わせるなら「貴族氣質である」が、「てれくさくて、おそろしくて」という言葉からもわかるように、「拒否の能力の無い」性格からきてるのである。「拒否の能力の無い不幸」について、菊田義孝氏は次のようにのべている。

内面世界の權威を樹立して、他人、世間社会との余りにも血肉の、情念的な關係を拒絶することのできなかつた者の不幸である。人並以上にすぐれた善意のヒューマニティーが、彼らをして、相対的な人間世界に限りなく自己を溺没させ、解体させ、喪失させてしまつたのである。

以上、「道化のくいちがい」「罪の意識」「拒否の能力の無い不幸」

この三つが、太宰を死に至らしめた原因の主要なものとして、直治を通じて確認できることである。

三 上原と太宰治

平野謙氏は、上原について、

ここに點描された一デカダンス作家に作者自身の分身を眺めたり、そのカリカチュアを感得したりする鑑賞法も、やはり私には間違つていると思えます。たとえ太宰治その人がよつばらつて實際に「ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ」というようなおまじないを唱えたことがあつたにしても、それはこの小説とはなんの關係もありませんまい。(中略)私の申しあげたかつたのは、ここに描かれたデカダンス作家が決して「滅びゆく」一人ではないという事實、おそらく弟直治の「末期の眼」にうつつた「田舎者の圖々しさ、馬鹿な自信、ずるい商才」こそかえつてこの人物の本質にちかひという事實であります。すくなくとも作者はそう設定している。

と述べている。上原に対して、平野氏は全く太宰の分身を認めていないのである。私は、この意見には反対なのである。「僕は高等學校へはひつて、僕の育つて来た階級とは全くちがふ階級に育つて来た強たくまじしい草の友人と、はじめて付き合ひ、その勢ひに押しされ、負けまいとして、麻薬を用ひ、半狂亂になつて抵抗しました」という直治の言葉からもわかるように、上原は貴族階級の間人ではないのである。したがつて彼には、直治のように、名門意識についての悩みはないわけである。しかしその反対に、太宰の名門

意識の裏にある田舎者という劣等感が、上原という人物に託されていると考えられる。直治からみた上原の「無教養、出鱈目、きたならしさ、田舎者の圖々しさ、馬鹿な自信、ずるい商才」それはすべて、彼がデカダンス作家におとしめられた結果、生まれたものなのである。生まれたというよりも、上原がそう装つていたのにもかかわらず、貴族出身である事に誇りをすてきれなかつた直治には、見破る事ができなかったのではないだろうか。上原の、この生き方も太宰における「道化」のあらわれと考へてもよいのである。なぜなら、もし本当に直治の言うように、上原が、「苦惱の無い、むしろ馬鹿遊びを自慢してゐる、ほんものの阿呆の快樂児」であれば、かづ子の前で言つた言葉、

死ぬ氣で飲んでゐるんだ。生きてゐるのが、悲しくつて仕様が無いんだよ。わびしさだの、淋しさだの、そんなゆとりのあるものでなくて、悲しいんだ。陰氣くさい、嘆きの溜息が四方の壁から聞えてゐる時、自分たちだけの幸福なんてある筈は無いぢやないか。自分の幸福も光榮も、生きてゐるうちには決して無いとわかつた時、ひとは、どんな氣持になるものかね。努力。そんなものは、ただ、飢餓の野獸の餌食になるだけだ。みじめな人が多すぎると。キザかね。

この言葉さえ、無意味となつてくる。だから、この言葉こそ、「馬鹿で阿呆の快樂児」を装つている上原からほとぼり出た本心であり、同時に太宰の本心であるとも言えるのである。「自分の幸福も光榮も、生きてゐるうちには決して無いとわかつた時、ひとはどんな氣持になるものかね」という上原の質問にかえつてくる答へは、当然「デカダン」か「死」であるにちがいない。上原とて、直

治に劣らぬ苦悩はあったのである。直治は苦悩の果てに自殺してしまつたけれど、上原は、死ななかつた。しかしそのデカダン生活が、やがては彼の健康を悪化させ、やがては、死へと結びつけるであろう。そしてつかれはて、死期を待つ上原こそ、これまで何度も自殺に失敗して、なお生きのびていた太宰治自身の姿であると言えよう。奥野氏の言葉をかりるなら、上原は、「太宰の一面である津軽の田舎者としての、打算的な凶々しさに対する自己嫌悪」なのである。つまり、太宰は、何の理想も、何の目的も見出せないまま、それでもなお生きている自分を上原という人物を造形することによつて批判しているのである。したがつて、直治の上原批判は、同時に自己批判ともなるのである。

以上のことから、やはり私には、平野氏の言われるように、上原と太宰とを、全く別の人間として考える事は、できないのである。

四 かず子と太宰治

お母さまも死に、直治も死に、上原は、生けるしかばねとなつた時、太宰に残されたものは、かず子の「恋と革命」を成就させることなのである。彼はそれを成功させる事によつて、自分自身が生存する最後の道を開こうとした。

かず子は直治と同じように貴族の出身である。しかし、直治とかず子の苦悩は、ちがつていた。直治の苦悩は、何をするにもいつもつきまとう階級意識であり、かず子のそれは、今まで働くという事を知らなかつた彼女が、伊豆の家に移つて畑仕事などをしてゆくうちに、だんだんと粗野な女になつてゆき、お母さまとはまるでちが

つた世界の人間になつてゆく事であつた。

「恋と革命」を知る以前の彼女は、「更級日記」の少女のように、いつも心の中で夢を追つているそんな少女だつた。

「大丈夫よ。直治は、大丈夫よ。直治みたいな悪漢は、なかなか死ぬものぢやないわよ。死ぬひとは、きまつて、おとなしくて、綺麗で、やさしいものだけ。直治なんて、棒でたたいたつて、死にやしない。」

お母さまは笑つて、

「それぢや、かず子さんは早死のはうかな。」

と私をからかふ。

「あら、どうして？ 私なんか、悪漢のおデコさんですから、八十歳までは大丈夫よ。」

「さうなの？ そんなら、お母さまは、九十歳までは大丈夫ね。」

「ええ、」

と言ひかけて、少し困つた。悪漢は長生きする。綺麗なひとは早く死ぬ。お母さまは、お綺麗だ。けれども、長生きしてもらひたい。私は願るまごつた。

「意地わるね！」

と言つたら、下唇がぶるぶる震へて来て、涙が眼からあふれ落ちた。

この母とかず子のたわいもない会話からもわかるように、かず子は、お母さまの死を想像するだけで涙を流すほど可憐な女性であつた。そして「自分の胸の奥に、お母さまの命をちぢめる気味のわるい小蛇が、はいりこんでゐて、その醜い蛇がやがて美しいお母さまを食ひ殺してゆくやうな気がして」そんな思いにいつも身悶えして

いた女性なのであった。そんなかわい女性であったかず子を、こんなにまで強くしたのは、一体何であったのか。

六年前、それは、かず子が直治の事で、小説家上原に会いに行つた時、突然彼にキスをされ、その「ひめごと」から生じた「恋」なのである。そしてそれは、唯一の生きる望みとしていたお母さまの死から、彼女を、いちはやく立ち直らせ、彼女に「鳩のごとく素直に、蛇のごとく慧かれ」というイエスの言葉を思い出させ、最後には古い道徳に対する革命さえも宣言させたのであった。そして彼女の「道徳革命」は、かず子が上原にあてた手紙の中に、「私は、あなたの赤ちやんを生みたいのです。他の人の赤ちやんは、どんな事があつても、生みたくないんです。」という言葉となつてあらわれるのである。その革命によつて古い道徳を破壊する。その破壊とは、かず子に言わせるなら、「破壊思想。破壊は、哀れで悲しくて、さうして美しいものだ。破壊して、建て直して、完成しようといふ夢。さうして、いつたん破壊すれば、永遠に完成の日が来ないかも知れぬのに、それでも、したふ戀ゆゑに、破壊しなければならぬ」ものなのである。それでもやはり、母の死には、ほんの少し、心をごす彼女なのである。

「死んで行くひとは美しい。生きるといふ事。生き残るといふ事。それは、大へん醜くて、血の匂ひのする、きたならしい事のやうな氣もする。」

しかし、彼女の生きる力、恋をした女の力の方が強く、美しい死への憧憬さえも押しつけてしまったのである。

「戦闘、開始」ついに彼女は、イエスが十二弟子を諸方に派遣するにあたって彼らに教え聞かせた言葉をかかげて、上原のもとに

向かうのである。かず子において「革命」とは、菊田氏の言われるように、今まで「倫理的な愛を、自分の本能に優位」させていたものを、「本能的な愛を倫理に優位」させることであり、つまりは、「倫理そのものに対する生命そのものの優位」となることなのである。これは、今まで「道化」によつて「他への奉仕」「他の為」の生きかたばかりしてきた太宰がはじめて、かず子を通して、自己のために生きようとしたことを意味する。それはかず子の革命でもあり、太宰自身の革命でもあったのだ。そしてそれは、彼の生命力となるはずであった。そしてなおも、かず子は言う。「私は、神の審判の臺に立たされたつて、少しも自分をやましいとは思はぬ、人間は、戀と革命のために生まれて來たのだ、神も罰し給ふ筈が無い。」直治の章で説明した、神の罰への恐怖もすべて否定され、ともすると神の存在さえも、権威さえも否定されようとしている。

やがて上原に会う事によつて、かず子の革命は成就され、愛する人の子供を宿したという点においては、成功と言える。かず子のいうように、「戀しい人の子を生み、育てる事が、道徳革命の完成」であるなら、上原の子を宿しただけの彼女は、まだ、第一回戦で「古い道徳をわずかに押しつけた」それだけなのである。それでいて彼女は、革命の犠牲者を讚美する。

犠牲者。道徳の過渡期の犠牲者。あなたも、私も、きつとそれなのでございませう。

革命は、いつたい、どこで行はれてゐるのでせう。すくなくとも、私たちの身のまはりに於いては、古い道徳はやつぱりそのまゝ、みちんも變らず、私たちの行く手をさへぎつてゐます。海の表面の波は何やら騒いでゐても、その底の海水は、革命どころか

みじろぎもせず、狸寝入りで寝そべつてゐるんですもの。

革命は、まだ、ちつとも、何も、行はれてゐないんです。もつと、もつと、いくつもの惜しい貴い犠牲が必要のやうでございませう。

いまの世の中で、一ばん美しいのは犠牲者です。

これらの言葉は、最初の「戦闘、開始」そして、「私たちは、古い道徳とどこまでも争ひ太陽のやうに生きるつもりです。」という覚悟に比べ、なんとも悲しい、自分をいとおしむナルシズムの匂いを感じられるのである。結局、かず子の言う革命とは、好きな人の子を生み、古い道徳とどこまでも争うことではなく、彼女が、この世に残存するための一つの理由にすぎなかった。そして、それを自己犠牲として、美化せずにはいられなかったのである。

奥野氏の言われるやうに、「太宰には、元来、生命力というものが欠如している」のである。したがって、かず子の革命が、単に残存するための一つの理由であるとすれば、生命力のない太宰には、「革命の成就」は不可能であり、再び、奥野氏の意見をかりるなら、「太宰はかず子を、単なる可能性としか想像できなかった」のであって、やはり太宰は、直治の段階において、死すべき人なのであった。

おわり

私は、以上のように、お母さま、直治、上原、かず子を、太宰と結びつける事によって、太宰の生と死の要因ともいうべきものを考察しようと思つたのである。「かず子と太宰」の章では、太宰が託

した「かず子」に、私もなんとか彼の生の道を見出そうとした。けれども、かず子の「生きる」という覚悟、それは太宰においては、根本的に欠けていた「生命力」の強さなのであった。そしてこの「生命力」という根本的な相違は、結局、かず子を創造することによって、かえつて太宰の「死」を、大きく浮きぼりにしてしまつたのである。

道化にいちがいを感じて、罪の意識から人間恐怖に陥つても、拒否の能力の無い人間であつても、かず子のような「生命力」があれば、彼はまだ生きていけたかもしれない。しかし、何の目的も理想もない「生」は、むしろ「生」ではなくなつてしまふ。「生けるしかばね」なのである。だが、自分を、そういう姿でしか、この世に残存させる事ができないところに、太宰の純粋性を見出す事ができるのでないだろうか。

「生命力」のなさ、それは、すなわち弱い、ということにはならない。たとえどんなに現実社会を非難したとしても、自分が虚偽の充満した現実を身置いているなら、現実社会だけでなく、自己の惰性も非難されるべきである。ナルシスト太宰治には、とことん自己を追いつめながら、結局自分を許してしまふ甘さがあることは否めない。しかし、『斜陽』においては、そうした自己許容の甘さを克服するための、さまざまな努力が認められる。自己を純粹に対象化し、それに無残な姿を与えることは決して「弱い」生き方ではあるまい。

太宰は、文学者である。現実社会において、矛盾のない生を実現することが不可能であれば、文学の中に、それを求めることができなはずである。しかし、彼には、そういう二元的な生活を送ること

はできなかった。『人間失格』の中で、主人公である大庭葉蔵が、「罪のアントニムは罰である」と述べているところがある。これと同じ方法で、「弱さ」のアントニムを考えるなら、それは、一三元的な生き方をしなかった太宰の「無垢の純粹性」と言うことができよう。

参 考 文 献

- 1 豊島与志雄 「斜陽」解説（新潮文庫）
- 2 平野謙 「太宰治論」（奥野健男編『太宰治研究』筑摩書房）
- 3 奥野健男 「太宰治論」（角川文庫）
- 4 菊田義孝 「太宰と罪の問題―かず子と直治―」（審美社）
- 5 山本健吉 「『斜陽』のかず子」（『太宰治研究四』審美社）

〔評〕

この論文は、多くの、きわだった新見にちりばめられているとは言えない。しかし、文学研究において陥りがちな、作家と作品とを相互に短絡させて安心してしまう不用意さを、厳しく戒めつつ進めている研究態度には、見るべきものがある。

西野さんは、いわゆる太宰ファンの一人である。一般に、信者の書いた論文は、主観性の強いものが多く、論理の欠如を招きやすいが、この論文は、作品の分析、対象化を通し、四人の人物を作者の分身と見立てて、太宰の本質に迫りえている。また、最後の、「弱さ」のアントニムは「無垢の純粹性」である、といった結語には、ファンならではの、深い愛情と認識が感じられる。（江後寛士）